

保有目的からみた林家の新しい類型区分

～ 森林経営の持続的展開に向けて～

森林政策学研究室 能本 美穂

1. はじめに

木材の安定的出荷、林業の収益率向上などをめざし、継続的投入、継続的産出というゴーイング・コンサーンとしての経営体の形成をどの層に求めるかという議論が数多く行われてきた。しかし、木材価格の低迷が続き、林業収益率は悪化の一途をたどり、それに加え労働力の高齢化など林業を取り巻く環境は一層厳しさを増している。そのような中で、林業収入により生計を立てる林家は減少し、総収入のうち、林業収入の占める割合は年々減少している。一方、近年林家の林業収入の充足度が減少する中で、森林ボランティアなどによる都市市民との交流など新たな森林とのかかわりが注目され始めている。これらのことより、材価の下落など林業を取り巻く環境の変化によって、生産を主とした林家の森林保有目的が多様化し始めていると考えられる。

今後、森林経営の持続的な展開を実現するには、環境の変化、それに伴う森林所有者の形態の変化に合わせた政策の検討が重要な課題である。保有目的が多様化する中で、これまでの生産能力を重視した林家の類型化だけでは、持続的な森林経営の展開にむけた政策の提言に限界があると言える。そこで、本研究では今後の持続的な森林経営の展開に向けた政策を検討することを目的とし、多様化する林家の保有目的を考慮した類型化を行い、その類型ごとの特徴、持続性、問題点などについての考察を行う。

2. 調査概要・結果

表-1 県別林家数

県名	戸数
福岡	6
熊本	8
大分	3
宮崎	8

表-2 規模別林家数

規模	戸数
1 ~ 10	3
10 ~ 50	13
50 ~ 100	3
100 ~ 500	2
500 以上	4

九州圏内、福岡県・熊本県・大分県・宮崎県の25戸の林家を対象に調査を行った。調査対象林家の県別、規模別林家数は表-1、表-2の通りになっている。また、今回の調査林家の選定は各県の行政担当の方等に委ねた。

各林家の保有目的、世帯の主な収入源、林業収入の占める割合などの調査結果に基づき、林家を類型化の類型化を行った。類型とその基準、また各類型ごとの調査結果は以下の表の通りである。

表-3 類型化の基準

類型	林業収入の割合	保有目的	その他
余暇・交流型	0～10%	趣味・交流の場、貯蓄	体力の続く限り現在の作業を続ける。
資産維持型	0～10%	資産保持	森林内部で資金が循環するよう計画をたてる。
生計維持型	30～100%	生計の手段、貯蓄	森林からの収益が少しでも上がるよう努力する。
放棄型			作業投入・今後の計画なし。

表-4 調査結果一覧表

分類	No.	保有山林面積 (ha)	世帯の主な収入源	林業収入の生計に占める割合 (%)	林業労働力	森林経営の後継ぎ	保有機械	伐期	間伐	皆伐	補助金の利用状況	材の出荷先		
余暇・交流型	1	8	年金	0	-	無し		-	-	-	-	-		
	2	15	恒常的勤務	0	自家労働	未定		70~80年	5~6年に1度	無し	全	-		
	3	22	恒常的勤務	20~30万円	自家労働	未定		長伐期	切捨・搬出3~4ha/年	無し	全	森林組合・民間		
	4	74	年金	0	自家労働	未定		長伐期	切捨	無し	一部	-		
資源維持型	5	1400	会社経営	?	直接雇用	未定		90~100年	5ha・1000m ³ /年	無し	全	民間市場		
	6	1000	会社経営	?	委託	未定	-	60~70年	3~5ha/年	無し	全	民間市場		
	7	1000	会社経営	?	委託	未定	-	長伐期	3~4ha/年	無し	全	県木連		
生計維持型	林業兼営型	自家労働型	8	23	林業	100	自家労働	未定	長伐期	3~4ha/年	無し	全	森林組合	
			9	35	林業	100	自家労働	未定	不定	利用・切捨各2ha/年	無し	全	製材所・森組	
			10	50	林業	100	自家労働	未定	長伐期	不定	無し	全	森組・個人業者	
			11	320	林業	60~70	自家労働+委託	有り	長伐期	不定	無し	全	森林組合・民間	
	委託・雇用型	12	290	林業	80~90	森林組合	未定		長伐期	?	無し	全	森林組合	
		13	1000	林業	70~80	直接雇用	未定		40年~50年	不定	5ha/年	全	民間市場	
		林業兼営型	農林複合型	14	20	農林業	?	自家労働	未定	長伐期	1~2ha/年	無し	全	森林組合
	15			30	農林業	40	自家+森林組合	未定	?	?	無し	全	加工場・森組	
	16			40	農林業	30	自家労働	未定		100年	不定	無し	全	森林組合
	17			45	農林業	30	自家+森林組合	未定		長伐期	不定	無し	全	森林組合
	18			46	農林業	40	自家労働	有り		短・長伐期	1ha/年	無し	全	森林組合
19	50			農林業	30	自家労働	有り		長伐期	1ha/年	無し	全	森林組合	
20	57			農林業	30	自家労働	未定		長伐期	4~5ha/年	無し	全	森林組合	
21	77	農林業	30	自家+森林組合	未定		80~100年	3ha/年	無し	全	森林組合			
経営放棄型	22	3	恒常的勤務	0	-	未定		-	-	-	-	-		
	23	5	農業	0	-	未定		-	-	-	-	-		
	24	21	恒常的勤務	0	-	無し	-	-	-	-	-	-		
	25	23	農業	0	-	未定		-	-	-	-	-		

資料：聞き取り調査より作成

* : 下刈機・チェーンソー : + 林内作業車 : + 小型バックホウなど *全：植林・下刈・間伐補助金全て申請 一部：植林・下刈・間伐補助金の一部申請

表 5 森林の保有目的等

分類	No.	保有山林面積 (ha)	世帯の主な収入源	森林の保有目的等	
余暇・交流型	1	8	年金	現在は個人で開設した竹林の公園の方に手をかけて、少々スギ・ヒノキの保有が遅れている。しかし竹林・クリ林は今後も趣味として、人との交流の場として大切にしたい。	
	2	15	恒常的勤務	今後も農業をリタイアした父親と2人で趣味として森林の手入れをしていく。将来的にちょっとした収入になればいいが、木材価格が安いために、期待はしていない。	
	3	22	恒常的勤務	現在、林業収入では生活維持はできないが、今まで手をかけてきた森林を大切にしたい気持ちには変わりはなく、森林のよさを都市住民の人々に伝える役割を自分の山で果たしていきたい。今後いろいろな人に山に来て欲しい。	
	4	74	年金	自分の体力の続く限り、切捨て間伐を行い、息子には手入れのしやすい山を残したい。今は趣味として作業をしている。	
資産維持型	5	1400	会社経営	先祖代々引き継がれてきた山なので、今後も残していきたい。	
	6	1000	会社経営	現在の木材価格では収入は期待しない。山だけで資金が循環できるよう経営努力をする。山を手放すのは家としての威厳を失う。	
	7	1000	会社経営	先祖代々受け継いだ山なので、大切にしたい。またいろいろな人に森林のよさを分かって欲しい。	
生計維持型	林業兼型	自営労働型	8	林業	現在の木材でも十分に生計は維持できる。計画の立て方と、技術次第で儲けることはできる。自分の山が管理できないようなら、できる人に売るべき。
			9	林業	森林は収入源。無節材の価格は下がっているけれども、必ず需要はある。きちんと自分の材に付加価値をつけることで、収入は確保できる。計画に基づいた施業をすれば今後も林業で生計は維持できる。
			10	林業	今後も林業で生計を立てる。
			11	林業	今後も林業で生計を立てる。
			12	林業	林業が主な収入源なので、木材価格の低迷により、今後が不安
	林業兼型	委託・雇い型	13	林業	皆伐面積を増やすことでどうにか収入を得ている。今後もなんとかして林業を続ける
			14	農林業	現在は農林業による収入で生計をたてている。しかし息子は農林業を継がないので今のうちに出るだけ手入れを行い、いい状態しておく。(5年後70才でリタイア予定)
			15	農林業	-
			16	農林業	-
			17	農林業	シイタケの直接販売を増やし、収入を増やしたい。今は補助金で林業をしている感じがする。
			18	農林業	農林複合経営により収入をあげる。短伐期と長伐期の組合せにより経営を維持していく。いい状態の山になっているので息子に代になると手入れが楽である。孫が後を次いでくれる。
経営放棄型	委託・雇い型	19	農林業	シイタケ収入で生計を立てる。山は貯蓄の代わりに育てる。	
		20	農林業	現在の主な収入源はシイタケである。間伐・択伐経営を行っているが、その収入が減ってきているので、皆伐を考えている。	
		21	農林業	主な収入源は農業である。林業で一定の収入を確保するために、広範囲をバランスよくきついている。組合せ・考え方・計画次第では十分に自分の山を守ることができる。	
		22	恒常的勤務	木材価格が上がったら立木売りをするつもり。	
		23	農業	昨年夫が亡くなり、現在残された牛の飼育で手一杯である。誰か山林を買ってくれないだろうか。	
		24	恒常的勤務	現在は父親名義になっているが、次の相続で所有が分散するので、今以上に森林に興味はなくなるだろう。	
		25	農業	林業が好きではない。今は生花販売で生計を立ており、その作業で忙しいために林業を行う時間はない。今後の森林の管理は頭が痛い問題である。	

4. 各分類の持続性、問題点

各類型の特徴、持続性、問題点・課題をまとめたものが表-6である。余暇・交流型は森林に対する意識が高いために、林業からの収入がほとんどなくても、一定の保育作業等を行っている。このことより、森林経営の持続的展開は可能であるといえる。問題点としては、伐期延長のため、径級が大きくなり間伐が技術的、体力的に困難になることが挙げられる。一方、今後ボランティアや交流の場として森林を開放していく場合、ネットワーク作りや情報の発信などが重要な課題になるといえる。

資産維持型は、主伐後の再造林費用・育林費用の捻出が困難であるために、現在主伐を極力控え間伐によって収益を上げている。以前は森林からの収入があり、継続的投入・継続的産出を行いうる主体と評価された時期もあり、計画的な森林経営を行っているといえる。しかし相続税の発生や大型自然災害などの発生により、経営計画が狂うことが問題点として挙げられる。そのため、相続税に対する何らかの措置や災害後の復旧支援が必要である。

生計維持型の自家労働力型は生産性が高い林家が多く、今後、森林の集約的施業を行いうる主体として評価できる。そして、経営放棄対策のためには、この層を活用した経営森林流動化を図るシステム作りが必要不可欠である。一方、農林複合型の場合は、主業である農業に関しても、経営の不安定要素が多く、また農・林業収入の下落を農業生産の増加分で補っている場合が多い。従って、双方の下落に伴い林業へのウエイトが低くなり、間伐等の保育が遅れる、また放棄されることが予測できる。そのため、農業と林業経営の安定化対策は急務である。また、現世代はなんとか経営を行っていても、次世代になると、後継ぎは未定・不在という場合が多く、世代交代後森林経営が放棄されるという状態も考えられる。そのために、特に山村における若い層の定住化対策は絶対条件である。

4. 総括

生産が主な保有目的でなくとも、一定の森林経営を行っていることより、放棄型以外は経営の持続的な展開能力があるといえる。しかし、特に中小規模林家の場合、下刈や間伐等の保育に対する補助政策が経営を支えている側面も大きく、今後経営を持続的に展開していくためには、森林の保有目的を考慮した各類型に適した政策支援・補助が必要になると考える。各林家レベルにおいては保有目的に沿った経営計画をたてる必要がある。また、現在経営が放棄されている森林については一部、経営能力のある者へと施業委託が必要となってくる。そのためには経営森林の流動化が必要になってくるといえる。

表-6 各類型のまとめ

類型		特徴	持続性	課題・問題点
余暇・交流型		趣味、生きがい、交流（森林PR役）		高齢化、技術・ネットワーク作り
資産維持型		計画性		相続税対策、大型自然災害
生計維持型	専業型 自家労働型 委託雇用型	高生産性 （特に自家労働型）		経営森林の流動化、・システム作り
	兼業型 農林複合型	経営の多様性、不安定性		経営の安定対策・定住化対策
経営放棄型		労働・資金力不足、 経営意識の希薄性	×	経営支援 or 施業委託システム